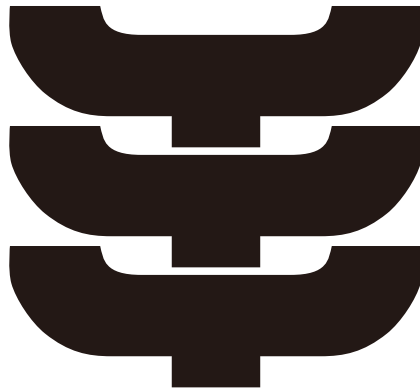


# 大野城市の文化財

第 43 集

大野城市の遺跡①乙金編



2011年

大野城市教育委員会

## 序

『大野城市の文化財』が完成しました。今回は乙金第二土地区画整理事業に伴う発掘調査成果について紹介します。

乙金地区では事業面積が41.2haにおよぶ大規模な区画整理事業が計画され、平成19年度より本格的な発掘調査に着手しました。発掘調査では旧石器時代から近世・近現代にいたるまでの様々な遺跡が発見されております。本書ではこれまでの調査成果について、古い時代から新しい時代へと順を追って報告し、乙金地区の歴史を紹介したいと思います。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、過去の人々がいかに生きてきたかを伝えるとともに、我々もまた歴史の中に生きていることを教えてくれます。本書が過去の人々のいとなみを現在、さらには未来へと伝えていくために、少しでも役立てれば幸いです。

平成23年3月31日

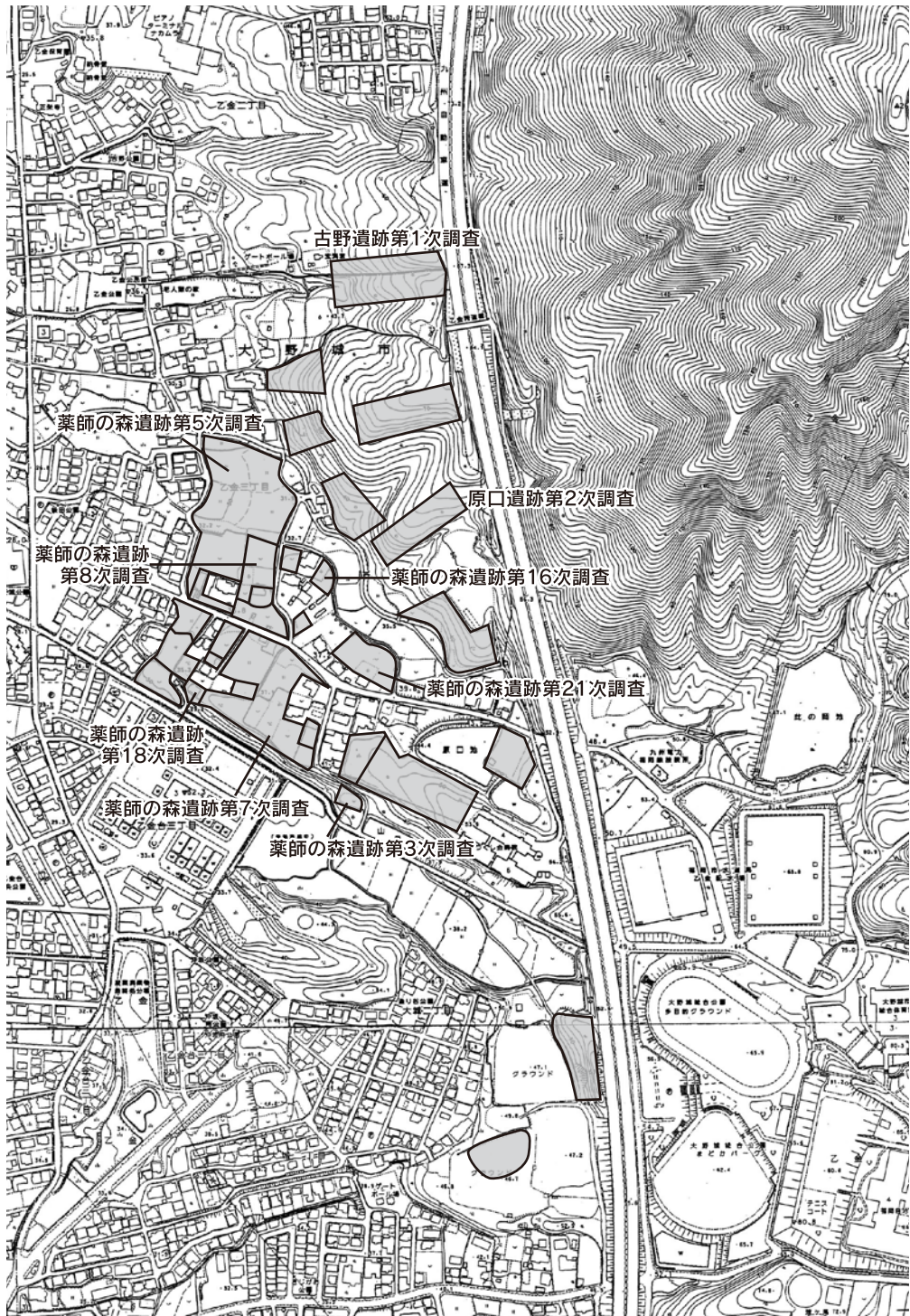
大野城市教育委員会  
教育長 古賀 宮太

## 目 次

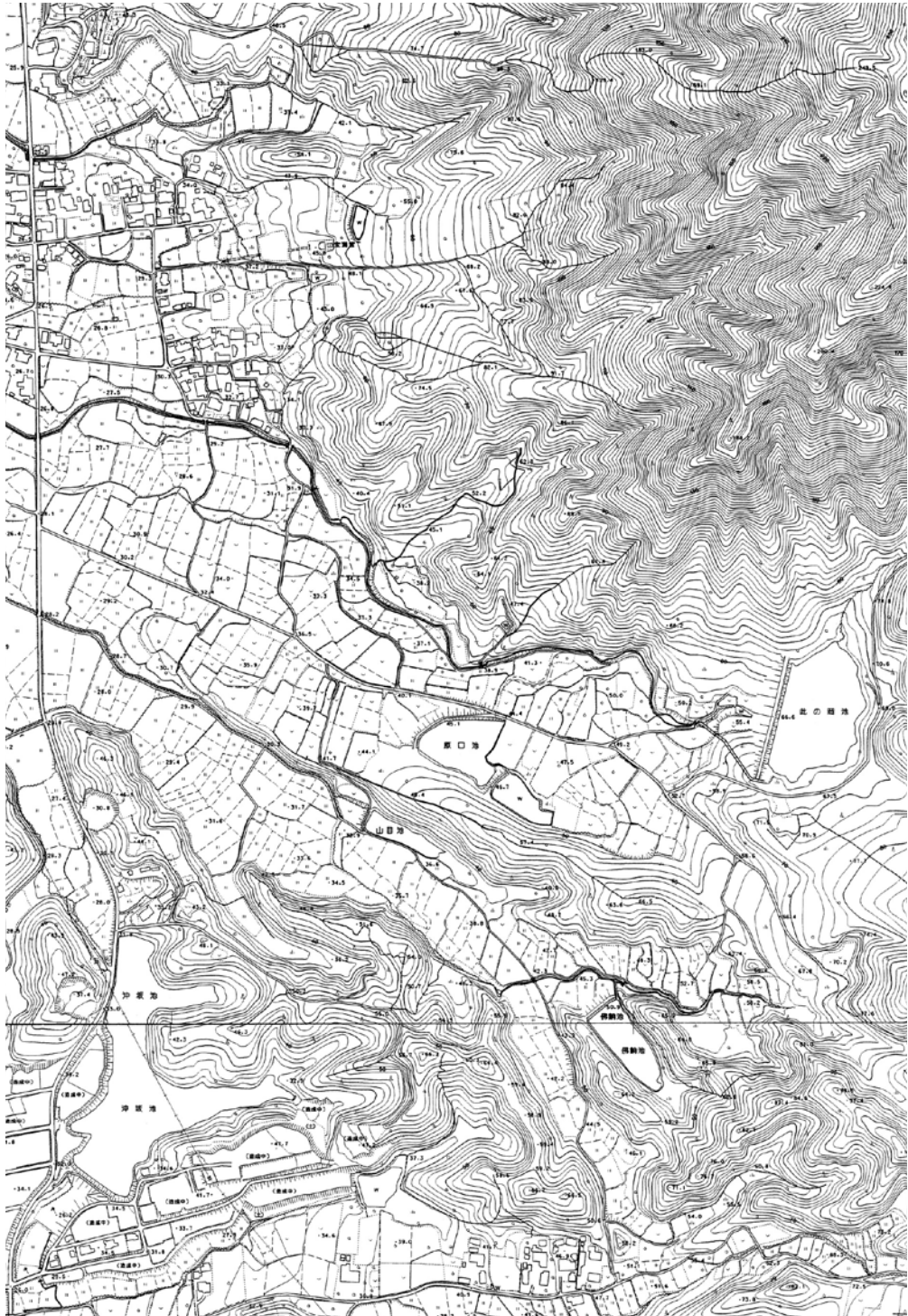
1. 旧石器・縄文時代—狩人たちの痕跡—	4
2. 弥生時代—大野城市最古の農村？—	5
3. 古墳時代—乙金大開発の時代—	6
i) 古墳を造る	
ii) 集落跡の発見と人々の暮らし	
4. 奈良・平安時代—小さな村と役人の姿—	10
5. 鎌倉・室町時代—再び大開発の時代—	12
i) 墓から見た中世の乙金	
ii) 乙金村のルーツ？	
iii) 大野城市内初、水田遺跡の発見	
6. 江戸時代	15
7. おわりに	16



写真1 区画整理以前の乙金（上が北）



第1図 区画整理前の乙金と発掘調査した場所 (1/7,500)



第2図 50年前の乙金の地形 (1/7,500)

## 1. 旧石器・縄文時代 —狩人たちの痕跡—

乙金地区では15000年以上前（旧石器時代）の石器が発見されており、当時から人々が暮らしていたことが分かっています。続く縄文時代（約12000年前～2500年前）になると、乙金地区の各所で、狩りの道具である石鏃（石の矢じり）（写真2）や煮炊きの道具である縄文土器が出土しています。特に薬師の森遺跡21次調査では、約8000年前の土器や石器が2500点以上発見されていることから、当時の中心的な生活の場であったと考えられるでしょう。



写真2 石の矢じり

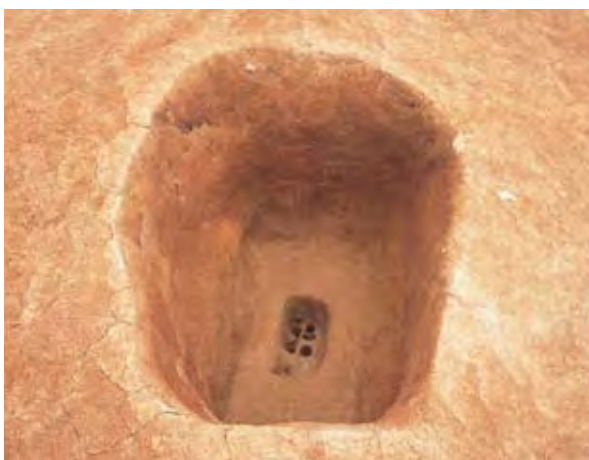


写真3 動物を狙った落とし穴

また、イノシシやシカを標的とした「落とし穴」(写真3) もたくさん見つかりました。深さは1m以上もあり、落ちたら簡単に脱出することができないものです。縄文人たちは、狩りの場、生活の場として、乙金地区の自然の恵みを活かしていたのでしょう。

## 2. 弥生時代 一大野城市内最古の農村？

弥生時代になると本格的な稲作農耕が伝わり、日本列島は農耕社会へと突入していくことになります。弥生時代への移り変わりは狩猟採集生活から農耕生活に変わっただけでなく、食生活や住まい、形質（骨格や顔つき）や思想までもが大きく変わった時代であり、社会の大転換期と考えられています。

ところで、弥生時代が始まるころ、薬師の森遺跡では小さな集落が営まれていたようです。ここでは「突帯文土器」といわれる縄文土器の系譜を引く土器と、「板付式土器」と呼ばれる弥生時代になって新たに出現する土器が、一つの遺構の中から一緒に出土しており注目できます（写真4）。突帯文土器とは縄文時代の終わりごろに出現する土器で、口縁部に粘土紐を貼り付けた「突帯文」という文様に特徴があります。土器は厚く、表面を貝殻によって整えており、全体に粗剛な印象を受けます（写真4右）。これに対し、板付式土器は口縁部が外側に折れ曲がる点が特徴で、器壁は薄く、土器表面をヘラのような工具で丁寧に整えており、非常に繊細なつくりをしています（写真4左）。このように系譜が異なる土器が一緒に出土することは、縄文時代から弥生時代に移行する時代における社会の複雑さを反映したものといえるでしょう。このほか、別の遺構では突帯文土器を含まず、板付式土器のみがまとまって出土しています（写真5）。土器以外では、稲穂の収穫具である石庖丁が出土しており、周辺で稲作をおこなっていたのかもしれませんが。薬師の森遺跡は、日本最古の農村といわれる福岡市板付遺跡から5 kmしか離れておらず、こうした立地条件から乙金地区にいち早く農耕文化の波が押し寄せたのでしょう。こうした資料は弥生時代開始期の社会を復元する上で非常に重要な発見といえます。乙金地区における弥生時代の遺跡はまだまだ不明なことが多いのですが、今後の調査に期待ができるでしょう。



写真4 突帯文土器(右)と板付式土器(左) 写真5 弥生時代の始まりをつげる板付式土器







写真7 乙金宝満宮の裏で発見された古墳



写真8 真上からみた古墳



写真9 正面からみた古墳

ます。これまでに調査した古墳のほとんどは、盗掘にあたり石を抜き取られたりしているため、大きく破壊された状態で発見されていますが、石室の中からは土器のほか、金メッキの耳飾や勾玉・ガラス玉などのアクセサリー、鉄鏃などの武器が発見されています。

## ii) 集落跡の発見と人々の暮らし

では、このような古墳をつくった人たちはどのような暮らしをしていたのでしょうか。次にムラの様子について見ていきたいと思います。

緩やかな丘陵<sup>ゆるかな丘陵</sup>の上にある薬師の森遺跡<sup>たてあなじゆうきよあと</sup>では5次調査地を中心にたくさんの<sup>たてあなじゆうきよあと</sup>堅穴住居跡が発見されており（写真10）、現在までに80軒ほどを確認しています。ほとんどが6世紀後半～7世紀初め頃のもので、比較的短期間に集中して人々が生活を営んだのでしょう。堅穴住居は1辺5mほどの大きさで、4本の柱で屋根を支えるつくりをしており、炊事場であるカマドを備えています（写真11）。住居の中からは土器などがそのまま残されていることもあり（写真12）、当時の人々の生活を垣間見ることが出来ます。

出土した遺物を詳しく調べてみることによって、ムラの中の様子が少しずつ明らかになってきました。例えば、焼き損ねた失敗品の須恵器<sup>すゑき</sup>や須恵器をつくる際に生じる焼き物の破片<sup>しやうこ</sup>が出土していることから、近くに須恵器をつくる工房<sup>こうぼう</sup>があったと推測できます。また「鉄滓<sup>てつさい</sup>」といわれる鉄の道具をつくる際の廃棄物<sup>はいきぶつ</sup>が多数出土していることから、ムラの中で鉄器<sup>てつぎ</sup>



写真10 古墳時代のムラの跡

カマド

**写真11 発掘された竪穴住居**

づくりをしていたのかもしれませんが。  
このようにモノづくりに関わる遺物  
が出土していることから、ムラの中  
に職人がいた可能性が大きいといえ  
るでしょ











## 6. 江戸時代

江戸時代の書物「筑前国続風土記拾遺」は御笠郡乙金村について、「本村（古野・上方・下方）雉尾」に集落があったことを伝えられています。本村とは現在の乙金公民館周辺、雉尾とは雉子ヶ尾つまり大城小学校周辺のことを示しています。乙金公民館から乙金宝満宮の一带は現在でも細い路地が入り組んでおり、江戸時代の農村の面影を今に伝えていいます。江戸時代の遺跡の多くは現在の集落の下に眠っていることでしょう。

発掘調査では、墓地を中心とする遺跡が発見されました。薬師の森遺跡第16次調査では200㎡ほどの非常に狭い範囲の中で、70個以上の墓穴が発見されました（写真22）。遺跡からは墓石も出土しており、「享保」「宝暦」「寛延」という年号を記したものがあることから、18世紀代を中心とする墓地と考えられます。墓の形は円形のものと同方形のものがあり、棺おけの破片が出土するものがあることから、一部は木棺に納められていたのでしょう。当時のお金である寛永通宝が出土しており、六道銭（三途の川の渡し賃）として墓に納められたものと考えられます。人骨が残っているものもあり、当時の埋葬方法や葬送儀礼を知る上で大変貴重な発見といえるでしょう。



写真22 江戸時代の墓地

## 7. おわりに

本書で紹介した内容は、調査成果のごく一部に過ぎませんが、1万年以上にわたって連続<sup>れんめん</sup>と人々が暮らし、歴史を積み重ねてきたことが分かってきました。数年前、水田と畑、山林が広がっていた田園風景は、区画整理事業によって新しい街に生まれ変わりつつあります。新しい街ではどのような暮らしが始まり、どのような歴史が重なっていくのでしょうか。



写真23 変わり行く乙金（平成23年2月）

大野城市の文化財  
第43集

平成23年3月31日

発行 大野城市教育委員会  
福岡県大野城市曙町2丁目2番地1号

印刷 (株)アドネット九州  
福岡県福岡市中央区渡辺通2-3-27

